

文化庁 平成 27 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業 「諸外国における民間文化支援の動向調査 |

2016 年度インドネシア調査(ジャカルタ)

実施日:2016年3月7日(火)~3月8日(水)

1. 調査の目的と概要

企業メセナ協議会では2015年より、諸外国における民間の芸術・文化振興の動向を調査し、文化支援の考 え方や枠組みの違い、日本の企業メセナとの比較や参考となる事例を得るため、ネットワークのある各国文化 機関を中心に現地視察とヒアリング調査を実施している。

今回は、2014年に弊会が主催した「文化は資本だ:創造経済とは何か―クリエイティブリーダーとビジネスリ ーダーによる国際会議」にゲストとして招いた都市研究ルジャックセンターの協力を得て、インドネシア・ジャカ ルタにおける文化機関を訪問し、文化施設やアーツカウンシル等、官民団体の取り組み事例を中心にヒアリン グを行った。また同時期に現地で実施された、弊会とルジャックセンターの共催による国際会議において情報 収集も行った。

ジャカルタでは、アーツカウンシルや文化専門家、アーティスト等によるインディペンデントな活動が活発に なり、ネットワークが形成されつつある。一方で現在のインドネシアでは、大企業や資本家を除いては、日本の ように多数の企業が独自の文化事業に取り組む例はあまり見られず、国際会議では文化・芸術活動と企業を つなぐ存在の必要性が指摘された。企業による寄付促進やトラストファンドづくり、関連省庁の予算で一定のパ ーセンテージを文化に投資する法整備といった提案もあり、「文化・芸術は社会の必需品」との意識の醸成が 重要との意見も官民の関係者から挙げられた。また現地では民間による文化支援は地域によるばらつきがあり、 特に貧困地域における格差は大きく、教育段階から文化・芸術に関する啓蒙をすべきとの声もあった。

2. 日程・視察先

3/8 (Tue)	1	国際会議「芸術文化振興と社会創造における企業の役割 ~ASEAN ネットワークの構
		築に向けて一ジャカルタ会議」聴講
		於:Fairmont Jakarta(Jl. Asia Afrika No.8, Gelora Bung Karno, Jakarta)
3/9	2	Komunitas Salihara (Pasar Minggu)
		Jl. Salihara 16, Pasar Minggu Jakarta Selatan 12520 Jakarta
	3	Cultural Center (Taman Ismail Marzuki)
(Wed)		Jl. Cikini Raya No. 73, Menteng, Daerah Khusus Ibukota Jakarta
	4	Visual Arts Collective (Ruang Rupa)
		Tebet Timur Dalam Raya, No.6 Tebet Jakarta Selatan

実施者: 荻原康子(事務局長)、末澤汐音(調杳研究)





3. ヒアリング結果

3-1. 国際会議"Art, Culture, and Creative Society

-The Role of Corporation, and ASEAN Network- Jakarta Conference"

- ■日時:3月8日(火)13:00~16:00
- ■会場:フェアモント・ジャカルタ
- ■登壇者(登壇順):

マルコ・クスマウィジャヤ(都市研究ルジャックセンター ディレクター、インドネシア)

リッキー・ペシク(インドネシア創造経済庁副議長)

尾崎元規(公益社団法人企業メセナ協議会 理事長)

加藤種男(公益社団法人企業メセナ協議会 専務理事)

イザン・サトリナ・モハメド・サレフディン

(マイ・パフォーミング・アーツ・エージェンシー ディレクター、マレーシア)

斉藤幸博(株式会社資生堂 企業文化部長)

ヒルマー・ファリド(インドネシア教育文化庁 長官)

ワイ・ダブリュー・ジュナリー(インドネシア・フィランソロピー・アソシエーション

メンバー、ラジャワリ・コーポレーション代表理事)

ハリョ・スプロボ(ファースト・ステート・インベストメント取締役社長)

http://www.mecenat.or.jp/ja/events/post/1_20_1/

■会議概要

※現地関係者の発言のみ抜粋。()内は発言者。

(1) インドネシア企業はなぜ文化支援を行うのか

第一には企業の中心的な人物が文化・芸術のサポートに関心を持っている場合、第二に企業の CSR を 担うマネージャーがいた場合、第三にアートへの架け橋となりうる人物が企業にいた場合に、文化・芸術 への投資が可能になる。(ファースト・ステート・インベストメント)



● 芸術・文化への愛着という感情的な理由による場合と、企業への見返りを期待して文化に投資する場合とがあるが、日本の資生堂では、芸術と社業の関係性が明らかで、アートサポートが自分たちのアイデンティティ確立につながっているという考え方はとても参考になる。社業と文化の関係性について問うことで企業のアイデンティティが何かわかってくる。顧客との関係性の強化やブランド力を高めることができる。ジョグジャカルタは文化を中心とした観光業の成功によって、地域にとっても行政にとってもよい影響をもたらすことができた。(インドネシア・フィランソロピー・アソシエーション)

(2) インドネシア政府の文化支援

- 政府では、2010 年頃から文化・芸術の持続的発展のための基盤づくりをするという合意があるが、まだ途中の段階。文化・芸術は贅沢品という考えがあり、個人寄付や慈善活動に頼っている現状から、文化・芸術は必需品という意識に変える必要があると考えている。(インドネシア教育文化庁)
- 創造経済庁は、以前は文化観光庁の下部組織だった。教育文化庁ではクリエイティブな事業に資金投資できるが、創造経済庁は経済的な価値創造の視点から、異なる政策をとっている。(インドネシア創造経済庁)

(3) 今後の文化支援について

- <u>まずは文化・芸術についての教育</u>が必要。どれくらいの学校が文化・芸術を教えているだろうか。個別に 支援している企業も少なくないが、協働的ではないために貧困地域は見逃されている。それでは育つ人 材も育たない。(インドネシア・フィランソロピー・アソシエーション)
- 第一に何をどこで育てられるのかを考え、実績をつくり、次に現状でできる計画を練りたい。長期的な目標を立てることが重要。文化と経済の新しい関係づくりにも賛成である。現在インドネシアでは、高級な製品をつくれても、リサーチ、想像力、クリエイティビティの不足により、満足に売ることができない。それらへの長期的な投資も必要。質の高い芸術・文化振興を行っていく必要がある。(インドネシア教育文化庁)

【参考】マレーシアの文化支援状況について

イザン・サトリナ・モハメド・サレフディン(マイパフォーミングアーツエージェンシー)のスピーチより

(1) マイ・パフォーミング・アーツ・エージェンシーについて

● 芸術・文化を支える環境づくりを目的として、2012 年に設立したプライベートな団体。企業、政府、コミュニティの媒介役となり、芸術・文化振興のために活動している。アートに関するディスカッションの場づくり、文化事業を担う起業家養成のセンター設立のほか、アーティストや文化団体の作品やマレーシア文化を世界に広げるためのロイヤル・ガラ・ファンドの運営も行っている。

(2) マレーシアにおける文化支援の現状

- マレーシアには 3 つの庁と 27 の政府系機関が文化・芸術に関わっているが、全体的な展望も明確な 方針もなくて非効率的。誰かがやるのを待っていたら、文化・芸術を取り巻く環境は 10 年先も変わらな いという思いから活動を始めた。マレーシアは地理的にも民族的にも、多文化、多民族、多宗教国家ゆ えの利点と脆さがある。文化・芸術がそうしたことへの支えになってほしい。
- マレーシアではイノベーションが注目されている中、文化・芸術の革新性が必要不可欠でありながらも





蔑ろにされている。企業にとって文化・芸術支援は高い ROI(資本利益率)が見込めるものであり、アートの社会的なインパクトを考える必要がある。

- 世界遺産となったペナンでは、地域コミュニティの保全と再構築に取り組み、若いアーティストの活動を 支援することで、マレーシア随一のFDI(外国直接投資)を誇り、観光客が倍増する成功をおさめた。文 化・芸術への支援は必ずしも資金的なものに限る必要はない。企業が 15 年間にわたりアーティストに 場所を無償提供してくれるという事例や、不動産会社が使用されていない土地を文事業のインキュベーションセンターとして再活用するような事例もある。
- 企業や政府から芸術・文化への理解は簡単には得られにくいため、情熱を持ったリーダーがいる団体がまとまる必要がある。マレーシアでは政府より企業の方が、文化・芸術への投資には積極的。日本の企業メセナ協議会を参考に、各企業による個別の芸術・文化支援だけでなく、民間が団結してサポートできる仕組みづくりに取り組んでいる。

3-2. 現地文化団体へのヒアリング

サリハラ・アートセンター

ギャラリーやダンススタジオ、劇場、レジデンス施設を備えた民間の文化施設。新しい創造性の実験場としてアーティストに広く提供され、多くのプログラムを企画している。







- <u>劇場、ギャラリー、音楽スタジオ、ダンススタジオ、ゲストハウス、屋上広場</u>など、さまざまな施設を持つ アートコンプレックス。パフォーマンス、映像上演、展覧会、文学フェスティバルのほか、「フェスティバル・サリハラ」を実施。日本やオーストラリア、イギリス、カナダ、フランスからもレジデントアーティストを迎えている。社会課題や哲学に関する講義、ワークショップなど、研究機関として教育プログラムも行う。
- 過去3年間はジャカルタ政府からの支援があったが、基本的には個人寄付が中心。設立メンバーの一人が東ジャワの新聞王で、施設を建設して提供(設計はマルコ・クスマウィジャヤ氏による)。その他には、プロジェクトごとにスポンサーやパートナーシップを得て運営している。
- 現代のインドネシアのアートを提示し、インドネシアのアートの実験場になりたいと考えている。アートにとって重要な新しいプロダクションのためには、資金と場所が必要。誰もが新しい創造活動をできるよう、協働プロジェクトやネットワークが必要であり、このような研究所がインドネシアには重要。国内でも、国際的にも新しい挑戦ができる才能を見つけたい。

【訪問日】2016年3月9日(水)11:00~

【面会者】マルコ・クスマヴィジャヤ(ディレクター)ほか

http://www.salihara.org/





カルチャーセンター (ジャカルタ・アーツカウンシル)

大中小の劇場や複数のギャラリー、アートスクール、映画館やプラネタリウムなどを含めたジャカルタの中心的な複合文化施 設であり、アーツカウンシル事務所も併設。 国内 550 の市制のうち、アーツカウンシルがあるのは 40 ほどで、活動的なのは 15 組織ほど。政府機関と連動しながらアーティストの表現の場の創出に力を注いでいる。

- 1998年に「インドネシアの春」によりスハルト政権が打倒されて 以来、民主主義の継続に不可欠な自由な発想をもたらすもの として、アートと文化が重視されている。
- ジャカルタ・アーツカウンシルは1968年に設立。理事、事務局 を含め 25 名のメンバーで運営。4~5 名のメンバーが約3年 の任期で交代する(最長で2期まで。マルコも2006~2009年 まで理事を務めた)。メンバーは3年毎に、ジャカルタ大学の 専門委員会が次のメンバーを推薦し、政府が任命する。
- 美術、音楽、演劇、ダンス、映画等のジャンルで、東南アジアの フィルムなどのアーカイブ事業と、ギャラリー・シアター運営、行政 活動を行っている。3 つの委員会があり、毎年、政府への事業計 画の説明が義務づけられている。
 - 敷地内には3つの劇場(200席、800席、1,200席)と2つのギャ ラリー、シアター(200 人規模、50 人規模)がある。施設の他も解放的で、駐車場でパフォーマンスを行 ったりできる。2016~18年にかけて駐車エリアの拡張と、新しい建物の建設を予定している。



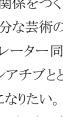


- ●ジャカルタ・アーツカウンシルの強みは、施設を所有していることと、 市の政策に働きかけられること、地域に働きかけられること。国内 550 の市制のうちアーツカウンシルが存在するのは40ほどで、活動的なの は約 15 団体。特に、東ジャワとジャカルタのアーツカウンシルが主要 な活動をしている。政府機関ととてもうまくやっていると感じている。
- ●アーティストが表現できる場をつくり、関係をつくることが私たちにで きること。1960年代のジャカルタには十分な芸術のインフラがなかった が、いまは小さなギャラリーが増え、キュレーター同士も協働している。 施設を維持しながら地域のアート・イニシアチブとともに、ジャカルタか ら国全体に対して影響を与えられるようになりたい。
- 社会づくり、文化振興のためには新しい経済を考える人と文化芸術 に関心をもつ人の関係が大切。メセナについては、人々のネットワーク ができここ3年くらいで実質的な動きが見られるようになっている。

【訪問日】2016年3月9日(水) 14:00~

http://dkj.or.id//







Ruang Rupa

アーティスト・イニシアティブにより運営するアートスペース。リサーチプログラムや大学との協働プログラム、若い才能に対する サポートプログラムを実施。持続可能な文化活動のため、さまざまなバックグラウンドの団体をネットワークし、資金や人的資源 をコモンリソースとして提供・活用しあうプラットフォームづくりにも取り組んでいる。

2000年に設立。 当初は6人で始めた小さい組織だったが、いまは30 人のメンバーがいる。団体名は「ビジュアル・スペース」という意味だ が、施設運営がメインではなく、アーティストのプラットフォームづくりの ための活動をしている。具体的にはリサーチ活動や協働プロジェクト、 2 つのフェスティバルの企画運営。1 つは学生のための、もう1 つはビ ジュアルアートのフェスティバル。若い才能を支援するサポートプログ ラムもあり、ジャカルタにある15の大学に参加を促している。海外の芸 術祭にも参加しており、日本では札幌ビエンナーレ、あいちトリエンナ ーレに参加した。



- ランニングコストは、アート作品の売上げやショップでの物品販売 のほか、オランダのプライベートな財団から、組織運営のために10年間にわたる長期グランドを得 ている。海外の基金が団体をサポートしてくれるのは大変珍しいこと。それでも運営資金や施設の 維持費、光熱費、スタッフの給与に費やされるので、ラジオ局などのスポンサーやパートナーシッ プで不足分を賄っている。
- 設立から 16 年が経ち、現在は 6 つの異なるバックグラウンドをもつ団体同士をつなぐプラットフォ 一ムをつくり、ビジネス、コミュニティづくりのための新しいエコシステムをつくりたいと考えている。

複数の団体と協働することで、人的資源やさまざまな専門性を 相互に共有し、持続的な活動ができるような仕組みをつくって いきたい。



http://ruangrupa.org/15/



以上